

「近代小説への道程」  
——王政復古期～18世紀初期の英国散文界を背景として——

**A Study of the Passage to Novel :**  
with the English Prose Writings from the Restoration to the Early  
18th Century for a Background

依藤 道夫

YORIFUJI Michio

(English Summary)

This paper discusses the development of the English prose writings and the passage to the novel in the Restoration era and in the early 18th century. It at the same time considers the history of the progress of the citizen's society as that history has a deep relation with the rise of novel.

John Dryden, John Bunyan, John Locke and other famous writers contributed to the establishment of the standard English prose style. Journalism was also a very important factor to the history of English prose style. Joseph Addison and Richard Steele were great essayists as well as early journalists. It might be said that they almost stood at the entrance of the modern novel.

At any rate, this paper tries to show the road to Defoe, Swift and Samuel Richardson.

I. 英語散文の確立と初期「小説」

1.

オリヴァー・クロムウェル (Oliver Cromwell, 1599-1658) の共和政権は、特に外交的には目覚ましい成果を上げたものの、時とともに次第に厳格で独裁的な性格を強めていった。その結果、それは革命の立役者クロムウェルが亡くなるとともに、事実上崩壊してしまった。

1660年5月、亡命先のフランスから帰ったチャールズ2世 (Charles II, 在位1660-85) が即位して、ここに王政復古 (the Restoration) が成る。フランス文化の影響を強く受けた王は「陽気な君主」(Merry Monarch) と呼ばれる奢侈で快楽好みの人物であった。そうした宮廷の影響で、一般の世相も前代の固苦しいまでの謹厳さ、厳格さを捨て、逆に快楽主義的な傾向を強めた。それを最も如実に反映したのが「風習喜劇」(Comedy of Manners) であった。これは当時の乱れた浮世の相を活写したものであった。

こうした享楽主義的な新風潮は、やはり、前代に対する反動の結果生じたものと見ることが出来よう。ともかく、清教徒時代に支配的だった理想主義的、改革的精神は後退し、現実的、散文的な精神の高まりが目立つようになった。かつての革新的な情熱は失われ、世俗的、風刺的な態度や考え方が一般化したと言える。

近代的な国王たるチャールズ2世は、国家の利益のために海外発展を進め、植民地の拡

大を計った。この王の時代には、トーリー (Tory)、ホイッグ (Whig) の2大政党の対立が始まる (1670年代)。トーリーの代表者で熱烈的な国教徒だったクラレンドン伯爵 (Edward Hyde, 1st Earl of Clarendon, 1609-74) が威を振った。彼は反動的な政治家として有名である。王立学会 (Royal Society) が設立されたのもこの時代、1662年のことであった。同学会の設立は、諸科学の進歩を大いに促進した。第二回英蘭戦争は、1664年から67年まで続き、オランダ軍艦がテムズ川まで攻め込んで来たことさえあった不毛の戦いであったが、これによって英国はニューヨーク (New York) を獲得した。また統一令 (Act of Uniformity) という1662年の法令は、国教統一を目的とする反動的なものであった。

チャールズ2世には子がなかったので、1685年、王弟でカトリック教徒のヨーク公ジェームズがジェームズ2世 (James II, 在位1685-88) として即位すると、その直後にチャールズの庶子モンマス公ジェームズ (James Scott, Duke of Monmouth, 1649-85) が乱を起こした。モンマス公の反乱事件と言われるものであり、王側が勝利を収めた。かねてよりトーリーの支持するジェームズ側とホイッグ党首領シャフツベリー伯 (Anthony Ashley Cooper, 1st Earl of Shaftesbury, 1621-83) に立てられた美貌で武勇の名高きモンマス公の陣営との間に王位を巡る抗争があり、ジョン・ドライデン (John Dryden, 1631-1700) はトーリー側に立って、有名な風刺詩『アブサロムとアキトフェル』 (*Absalom and Achitophel*, 1681) を書いていた。旧約に出るアブサロムの父ダビデ王 (King David, c. 1000B.C., イスラエル第2代の王) への謀叛の故事を引き、モンマス公及びシャフツベリー伯を痛烈に皮肉ったものであった。ともかくモンマス公は85年敗れて、刑死してしまったのである。

だが、カトリックのジェームズ王は、専制政治を強化し、反動の姿勢を強めてゆく。その結果、1688年11月、史上に名高い名誉革命 (Glorious Revolution) が成就し、オランダ総督だったウィリアムがウィリアム3世 [William III (Prince of Orange), 在位1689-1702, ジェームズ2世の甥] として女王メアリ (Mary, ジェームズ2世の娘) とともに英国統治に当たることとなった。新教徒のウィリアムは、新教を擁護し、議会を重んじた開明的な君主として知られる。

## 2.

王政復古期の文学も、世相を反映して、快楽主義的な傾向を帯びた。既に触れたように、フランス風の低俗な風習喜劇が隆盛を極めたことがそれをよく物語っている。そして、文学思潮の面では、ドライデンに代表される古典主義 (Classicism) が規範となり、これは次の18世紀に全盛期を迎える [18世紀の古典主義者としてはアレクサンダー・ポープやジョンソン博士 (Dr. Samuel Johnson, 1709-84) らが代表的]。この古典主義は、フランスのボワロー (Nicolas Boileau-Despréaux, 1636-1711) の『詩法』 (*L'Art Poétique*, 1674) などの影響を強く受けたものであった。規則や法則、秩序を重んじる理知的なゆき方である。

この時代の文学の中心は劇壇にあり、しかも風習喜劇が最も盛んだった。風習喜劇作者としては特にウィリアム・ウィッチャレー (William Wycherley, 1640?-1716)、トマス・オットウェー (Thomas Otway, 1652-85)、ウィリアム・コングリーヴ (William Congreve, 1670-1729) などが著名である。とりわけコングリーヴは、この種の劇の完成者として知られ、代表作には有名な『世間道』 (*The Way of the World*, 1700) がある。

他方、詩の面では、風刺詩の長篇傑作『ヒューディブラス』(*Hudibras*, 1663)を書いたサムエル・バトラー (Samuel Butler, 1612–80) が代表的である。『ヒューディブラス』は清教徒を攻撃した評判作で、「ヒューディブラスティック」(Hudibrastic, 「滑稽で風刺的な」の意)なる言葉さえ生み出した。チャールズ2世も愛読して、バトラーに300ポンドの大金を与えたと言われている。

### 3.

王政復古期文壇の大御所ジョン・ドライデン (John Dryden, 1631–1700) は、劇、詩の両面において大活躍したのみならず、散文分野にも健筆を振った。彼は1631年の8月に英国中部ノーサンプトンシャー (Northamptonshire) のオールドウィンクル (Aldwinckle) に生まれ、名門のパブリックスクールたるウェストミンスター・スクール (Westminster School) に、次いでケンブリッジのトリニティ・カレッジに学んだ。1657年にロンドンに定住した後、ピューリタン側に立ってクロムウェルの追悼詩を書いたが、王政復古になると王党派に鞍替えして新国王を迎える詩を作った。後年、新教からカソリック教へも改宗している。ジョンソン博士がこうした彼の変節振り、無節操振りを非難したのは有名な話である。このあたり、ドライデンはミルトン (John Milton, 1608–74) やバンヤン (John Bunyan, 1628–88) とはまるっきり違っている。

ドライデンは、最初、英雄劇 (heroic plays) や喜劇を書き、それから風刺詩に転じた。1670年には桂冠詩人 (Poet Laureate) と王室資料編纂所員 (Historiographer Royal) に任命されるという栄誉を担ったが、これらの地位は名誉革命で失っている。劇作では、英雄悲劇『グラナダの征服』(*The Conquest of Granada by the Spaniards*, 1672) や喜劇『当世風結婚』(*Marriage-à-la-Mode*, 1673)、それにシェークスピア (William Shakespeare, 1564–1616) の『アントニーとクレオパトラ』(*Antony and Cleopatra*, 1606) の改作『すべて恋ゆえに』(*All for Love, or the World Well Lost*, 1678) などをものしている。また風刺詩の代表作が既出の『アブサロムとアキトフェル』である。

ドライデンの散文面の業績としては『劇詩論』(*Of Dramatic Poesie: an Essay*, 1668,84) が最もよく知られている。これは英国批評史上の一大古典となった作品である。

晩年のドライデンは、隠退して古代ローマのジュヴナール (Juvenal, c.60–c.130) やヴァーギル [Vi(e)rgil, 70–19B.C.] などを翻訳し、また古代ギリシャのホーマー (Homer, 紀元前9世紀。ホメロスとも言う) やイタリアのボッカチオ (Giovanni Boccaccio, 1313–75) の『デカメロン』(Decameron, 1348–53)、それに『カンタベリー物語』(*The Canterbury Tales*, 1387–1400) などの英訳『古今物語集』(*Fables Ancient and Modern*, 1700) を仕上げた。彼は名誉革命後はもはや“転向”もきかず、昔日の勢力を失っていた。

ドライデンは、『劇詩論』などを著わして、ジョンソン博士から「英国批評の父」(The Father of English Critic) と呼ばれたが、これらの散文作品を通じて、英語散文の確立にも大いに貢献した。『劇詩論』は実在人物をモデルにしたと思われる4名の登場人物の会話から成り立っている。英蘭両海軍の戦うさ中、この4人がテムズ川に小舟で乗り出し、当時の文壇で論争的となっていた文学上の諸問題を論ずるという形を取っている。その諸問題とは、古典作家と近代作家の比較、英仏両演劇の優劣、エリザベス朝期・王政復古期両演劇の優劣、古典主義の法則、押韻詩 (rhymed verse) と無韻詩 (blank verse) の優

劣などである。また4名は、ネアンダー (Neander) が若きドライデンを表わし、他の3名も当時の若い詩人たちをモデルにしたものと考えられている [クライティーズ (Crites) = ロバート・ハワード卿 (Sir Robert Howard, 1626-98)、リジディーアス (Lisideius) = チャールズ・セッドレー卿 (Sir Charles Sedley, ? 1639-1701)、ユージニアス (Eugenius) = チャールズ・サックヴィル (Charles Sackville, Lord Buckhurst, 1638-1706)]。

この作品は、シセロ (Cicero, 106-43 B.C., キケロとも言う) を手本としたものであり、古代ギリシャの哲人プラトン (Plato, 427? -347? B.C.) の系譜上にも位置するものである。シセロ的対話を基本とする本作は、作者には珍しく、単独の批評書として公刊された。1684年には改訂版も出されている。作者が重視していた作品であることは間違いない。彼の博識振りもよく知れる傑作である。

#### 4.

『劇詩論』は、冒頭にバックハースト卿にあてた文章が掲げられ、次いで読者への短い前置が述べられた後、次のように本文が始められている。

それは、あの記念すべき日のことだった。この前の戦争の最初の夏、わが海軍はオランダ海軍と戦っていた。前古未曾有<sup>ぜんこみぞう</sup>の強力にして装備優秀な二つの艦隊が、地球の大半の制覇をかけ、国際貿易と世界の富を争って、その支配権を戦い取ろうとしている日であった。・・・両艦隊の打ちだす砲声は、われわれロンドン市民の耳にも達し、不安に駆られた人々は、今こそ決戦の時と、戦況の帰趨をうかがわんものと、各自思いのままに砲声の方向に足を向けた。そのためにロンドンの街に人影は消え、ある者は聖ジェイムズ公園に、またある者はテムズ河を渡り、さらにまた河を下る者もあったが、いずれも黙りこくって砲声を求めていた。

その中であって、ユージニアス、クライティーズ、リジディーアス、ニアンダーの四人は相会することとなった。そのなかの三人は知力と能力のゆえに全市に謳われた人物であるが、以下に叙する彼らの討論の様子が、拙文の不行届きのため本人に迷惑のかかることを恐れ、あえて本名を伏せることにしたい。

ジョン・ドライデン 『劇詩論』 (小津次郎訳注。研究社)

It was that memorable day, in the first summer of the late war, when our navy engaged the Dutch: a day wherein the two most mighty and best appointed fleets which any age had ever seen disputed the command of the greater half of the globe, the commerce of nations, and the riches of the universe. . . . the noise of the cannon from both navies reached our ears about the City; so that all men being alarmed with it, and in a dreadful suspense of the event which we knew was then deciding, every one went following the sound as his fancy led him; and leaving the town almost empty, some took towards the park, some cross the river, others down it; all seeking the noise in the depth of silence.

Among the rest, it was the fortune of Eugenius, Crites, Lisideius, and Neander to

be in company together: three of them persons whom their wit and quality have made known to all the town; and whom I have chose to hide under these borrowed names that they may not suffer by so ill a relation as I am going to make of their discourse.

John Dryden: *Of Dramatic Poesy and Other Critical Essays*, vol.1, Everyman's Library, Dent ; Dutton

この作品は、比較的短いものであるが、大変論理的であり、古典的な名編とされている。文章はよく整っており、平明、簡素と言ってよい。英語散文の標準的様式が確立したのはこの17世紀後半のことと考えられているが、この面でドライデンの文章はバンヤンのそれとともに大きな貢献をしたとみなしてよい。彼らの平明、簡潔なスタイルが、当時及び後代に与えた影響には実に大なるものがある。別の一文である。

ではまず、シェークスピアから始めよう。彼は近代のすべての作家の中で、いや古代の詩人を含めても、最も大きな、最も包容力の広い精神の持主だった。自然のすべての形象がいつも眼前にあった。それを何の苦勞もなしに、すらすらと描いた。彼の描いたものは何でも、われわれはそれを見るだけではなく、感じることもできる。

『劇詩論』(小津次郎訳注。研究社)

To begin, then, with Shakespeare: he was the man who of all modern, and perhaps ancient poets, had the largest and most comprehensive soul. All the images of nature were still present to him, and he drew them not laboriously, but luckily; when he describes any thing, you more than see it, you feel it too.

*Of Dramatic Poesy*, vol. 1, Everyman's Library

これはシェークスピアの真価を正しく論じた有名な一節である。なお、ドライデンは、『古今物語集』の序文でも、チョーサー (Geoffrey Chaucer, 1340? -1400) を「英詩の父」(the father of English poetry) として高く評価しているが、これも彼の鋭い批評眼を示すものである。

多才な才能を誇ったドライデンは、このように散文面でも少なからぬ業績を上げたのであるが、この時代における英語散文の完成、定着を示すように、同分野における他の人々の活動も顕著であった。

5.

日記面では、サムエル・ピープス (Samuel Pepys, 1632-1703) とジョン・イーヴリン (John Evelyn, 1620-1706) が著名である。特にピープスは、文学的にも高い資質を有していた。ロンドンの仕立屋の息子ピープスは、ケンブリッジのマグダレン・カレッジ (Magdalene College) に学び、後、王立学会員になり、海軍長官にまで出世した人物である。彼の『日記』(Diary) は王政復古の年即ち1660年の1月1日から1669年5月末日までつづられたものである。イーヴリンに比べると、期間は短いが芸術作品としての価値はよ

り高い。速記用暗号で書かれた。長らく彼の母校ケンブリッジのモードリン学寮に保存されていたが、1825年になって、ジョン・スミス (John Smith) が解読に成功し、出版して、世の脚光を浴びるに至っている。上流社会、大疫病、ロンドン大火、海軍などについての貴重な記述も含んでおり、社会的、歴史的記録としても重要な文献である。

次の引用文は、1666年9月のあの恐るべきロンドン大火の生々しい記録の一部である。

九月二日 (日曜日) 私どものメイドの数人が今日の祝宴の準備のために昨夜遅くまで起きていたが、ジェーンが早朝三時頃に私たちを呼んで、シティで見た大火事のことを話そうとした。それで私は起き上がり、夜着をはおって彼女の窓のところへ行ってみた。そしてそこが遠くともマーク通りの裏側だと思った。しかし、そのような火事に不慣れだったので、私はかなり先の方だと考えた。そこでまたベッドに行って寝た。7時頃再び起きて服を着、窓の外を見た。火が以前ほどでなくなり、ずっと離れているのが分かった。そこで押入れに物を整頓する。昨日洗濯したからである。まもなくジェーンが来て私に話したところによると、彼女は私たちが見た火事によって今夜300軒以上の家が焼失し、火は今もロンドン橋のそばで、フィッシュ街をすべて焼きつつあるということである。そこで私は直ちに準備して、ロンドン塔へと歩いた。そこで高い場所の一つに上がり、J・ロビンソン卿の小さな息子も私と一緒に来た。そして私は橋のそちらの端の家々がすべて炎上中なのを見た。橋端のこちら側もあちら側も際限のない大火の中にあった。・・・そこで私は岸辺に降りて、舟に乗り、橋を抜けて行った。そこで悲しむべき火を見た。

サムエル・ピープス『日記』(筆者訳)

*Sept. 2nd. (Lord's day) —Some of our maids sitting up late last night to get things ready against our feast to-day, Jane called us up about three in the morning, to tell us of a great fire they saw in the City. So I rose, and slipped on my night-gown, and went to her window; and thought it to be on the back-side of Marke-lane at the farthest; but, being unused to such fires as followed, I thought it far enough off; and so went to bed again, and to sleep. About seven rose again to dress myself, and there looked out at the window, and saw the fire not so much as it was, and further off. So to my closet to set things to rights, after yesterday's cleaning. By and by Jane comes and tells me that she hears that above 300 houses have been burned down to-night by the fire we saw, and that it is now burning down all Fish Street, by London Bridge. So I made myself ready presently, and walked to the Tower; and there got up upon one of the high places, Sir J. Robinson's little son going up with me; and there I did see the houses at that end of the bridge all on fire, and an infinite great fire on this and the other side the end of the bridge; ... So I down to the water-side, and there got a boat, and through bridge, and there saw a lamentable fire.*

*The Diary of Samuel Pepys selected with Introduction  
& Notes by Daiji Hori, Kenkyusya, Tokyo*

目の当たりにした悲劇的な大火の迫りに満ちた描写の一部である。簡明な文章でつづられた情景描写の中に緊迫感があふれている。

イーヴリンの日記〔*Memoirs (Diary)*〕の記述は1641年から1706年までの長期にわたっている。これまた19世紀になって（1818-19）印刷されている。これにもロンドン大火の記述が含まれている。

1666年9月2日。—この致命的な夜の10時頃、あの悲惨な大火はロンドンのフィッシュ街近くで起こった。

3日。—大火は続いている。夕食後、私は妻と息子をつれて馬車に乗り、サウスウオークのバンクサイドへ行った。そこで、私たちはあの恐ろしい光景を見た。水辺近辺では町中がものすごい炎に包まれていた。橋からすべてのテムズ街、チープサイドにかけて、そしてスリー・クレインズにかけてすべての家屋が今や灰燼に帰っていた。

ジョン・イーヴリン『日記』（筆者訳）

1666, *2nd Sept.* —This fatal night, about ten, began that deplorable fire near Fish Street, in London.

*3rd.* —The fire continuing, after dinner I took coach with my wife and son, and went to the Bank-side in Southwark, where we beheld that dismal spectacle, the whole city in dreadful flames near the water-side; all the houses from the bridge, all Thames Street, and upwards towards Cheapside, down to the Three Cranes, were now consumed.

John Evelyn: *Diary* (*An Anthology of English Prose*, arranged by S.L. Edwards, Everyman's Library, Dent ; Dutton

イーヴリンは続けて、泣き叫び、狂ったように走りまわる市民たちのことも筆にしているが、凄惨な大火をやはりリアルに記録していると言える。文章も簡明である。

イーヴリンは、王党側の政治家で、王立学会員でもあった。彼の『日記』はその生涯の大半を記録する長大なものであった。彼は博識で、造園、建築、古銭学などの造詣も深かったと言われる。

次に随筆ではウィリアム・テンプル卿 (Sir William Temple, 1628-99) が挙げられるが、彼は有力な政治家、外交官であった。ジョナサン・スウィフトが一時期彼の秘書をつとめていたことでも知られる。アイルランド論やネーデルランド論をはじめとして多くの著作がある。また、スウィフトはテンプルの書簡を編んでいる。テンプルの散文は、後、18世紀において模範とされたという。

私はよく承知していることだが、威厳を見せることによって賢<sup>かしこ</sup>振る大勢の人々は、まじめな人たちの使用や楽しみのためには余りにも軽<sup>かる</sup>過ぎる玩具か何かくだらぬものだとして詩と音楽を両方とも軽蔑しがちである。しかし、これらの魅力に全く無感動だと思ふ人は誰でも、私が思うに、それを打ち明けないのがよいだろう。それは自分の短気をとがめず、また理解力のではないにしても、自らの性格の善<sup>よ</sup>さを疑問視しな

いたためである。それは悪い体質ではないにしても、少なくとも悪い徴候だと考えられるであろう。なぜなら、何人かの先達たちは進んで、音楽への愛好を宿命的なしるしとみなし、神聖なものと尊び、天国自体の至福のためにとっておくものとしているからである。

ウィリアム・テンプル『随筆集』〔“詩について”（筆者訳）〕

I know very well, that many, who pretend to be wise by the forms of being grave, are apt to despise both poetry and music as toys and trifles too light for the use or entertainment of serious men: but whoever find themselves wholly insensible to these charms would, I think, do well to keep their own counsel, for fear of reproaching their own temper, and bringing the goodness of their natures, if not of their understandings, into question: it may be thought at least an ill sign, if not an ill constitution, since some of the fathers went so far, as to esteem the love of music a sign of predestination, as a thing divine, and reserved for the felicities of heaven itself.

William Temple: *Essays (An Anthology of English Prose, Everyman's Library)*

簡明で秩序立った優れた文章である。知的で格調も高い。

6.

「小説」類は依然として本格的には始動していないが、英文学史上最初の作家と言われるアフラ・ベーンをはじめとして、共和派の政治家ヘンリー・ネヴィル、風習喜劇の大家ウィリアム・コングリーヴ (William Congreve, 1670–1729)、人生の詳細は不明のロマンス作家エマヌエル・フォード (Emanuel Ford 17世紀初頭) などの活躍が見られた。

コングリーヴは優れた風習喜劇作品の他に『匿名の婦人』 (*Incognita: or Love and Duty Reconcil'd*, 1692) という“小説”をものした。フローレンスの名士で裕福な紳士の息子オーレリアン (Aurelian) と侯爵の娘ジュリアーナ (Juliana) の物語である。E・フォードは『オルナトスとアルテジア』 (*The Most Pleasant History of Ornatus and Artesia*, 1598?) や『パリスムス』 (*Parismus, the Renowned Prince of Bohemia*, 1598)、その続編 (*Parismenos*, 1599) などを書いた。

さて、ヘンリー・ネヴィル (Henry Neville, 1620–94) は、バークシャー (Berkshire) のビルingham (Billingham) のヘンリー・ネヴィル卿の息子であった。オックスフォードに学んだが、学位を取らないまま大陸旅行に出た。革命勃発で議会軍に入る。後、クロムウェルに反対してロンドンから追放されたが、クロムウェルの死後、復帰している。更に議会から追われかかったり、また「ヨークシャー蜂起」に連座したとして逮捕され、ロンドン塔に入れられたりしたが、王政復古後は晩年にかけて隠退のうちに著作活動などを続けている。

こういう風に、ネヴィルの<sup>おおやけ</sup>公の活躍は共和国時代のことであり、そうした時期の著作もいろいろあるが、文人としては、主として、王政復古期の「小説」たる『松の島』 (*The*



*Isle of Pines*, 1668) やマキアヴェリ (Machiavelli, 1469–1527) の作品の翻訳などで知られている。

『松の島』は風変わりな短篇作品である。16世紀末、エリザベス女王の時代、英国を出帆した船が喜望峰を回って、東方へ向かうが、難破し、「主人の帳簿係」だった「私」を含む生き残りの人々が大きな無人島に漂着する話である。「南海のパラダイス」を思わせる作品である。このようにして、私と主人の娘、2人のメイド、黒人女の男一名、女4名の都合5人が、この島で、長年月に渡って生きてゆくことになる。

3日目になって、夜が明けるや否や、私たちが妨げる何ものも見えなかったので、私は住まうに便利な場所を探した。それは、天候から身を守り、それに私たちが発見するかも知れない野獣の災の危険を防ぐための小屋を建てたいがためであった。・・・一週間の内に私は船から持ち出せた物と私たち全員を収容するに足る大きな小屋を作った。・・・

『松の島』(筆者訳)

The third day, as soon as it was morning, seeing nothing to disturb us, I lookt out a convenient place to dwell in, that we might build us a hut to shelter us from the weather, and from any other danger of annoyance from wild beasts, if any should find us out.・・・I in the space of a week had made a large cabin big enough to hold all our goods and ourselves in it.

H.Neville:*The Isle of Pines* (Shorter Novels: Seventeenth Century, Everyman's Library, Dent ; Dutton)

読みやすいすっきりした文章である。結局、「私」と4人の女性の間に子孫が増え続ける。16年経て47人の子が生れ、育ち、22年目に黒人女が死ぬ。子同士が結婚し合い、来島40年「私」が60才の時、子孫は443人にふえた。妻の一人が68才で死に、やがてもう一人も死ぬ。更に12年後主人の娘が亡くなる。「私」は長男を王とし、長女をその妻として、ヨーロッパの流儀を教え、キリスト教を忘れないように命じた。更に同じ言語を保ち、他所から入って来ても他のそれは認めないようにと定めた。

「私」は来島59年、ほぼ80才になり、子孫を数えたら1789人いた。こうして一族に私のジョージ・パイン名から「イングリッシュ・パインズ」(the English Pines) の総称を与え、「イングリッシュ」、「トレヴァーズ」(the Trevors)、「フィルズ」(the Phils) 等の家名を残した。

単純なストーリーだが、数奇な運命を描いた作品ではある。「私」が最後に自分の物語を書き、長男に託した形になっている。デフォーもネヴィルのこの作品を読んだに違いない。A・ベーンについては、あとで詳細に検討してみたい。

7.

散文界では他に歴史面でクラレンドン伯が『イギリス叛乱内乱史』(*The True Historical Narrative of the Rebellion and Civil Wars in England*, 1702) を著わした。また、伝記面で

は、ハッチンソン夫人 (Lucy Hutchinson, 1620–80?) やニューキャッスル公夫人 (Margaret Cavendish, Duchess of Newcastle, 1624?–74) がそれぞれの夫を回想した作品を書いた。前者は、王政回復時、クロムウェル方議員だった夫を救わんと努力し、夫の死後、『ハッチンソン大佐の生涯の回想録』 (*Memoirs of the Life of Colonel Hutchinson*, 1806) をものした。後者は、夫の伝記 (1667) の他に、エッセイや詩も残している。

自然科学は、この時代大いに進歩したが、万有引力の発見者アイザック・ニュートン (Isaac Newton, 1642–1727) の主著『自然科学数学原理』 (*Philosophia Naturalis Principia Mathematica*, 1687) は、この分野の記念碑的作品であるとともに、この期の散文界の代表的産物の一つに数えることが出来るであろう。

最後に大哲学者ジョン・ロック (John Locke, 1632–1704) の作品にも触れておかねばなるまい。彼は主として名誉革命の時代に活躍した。中産階級のピューリタンの家に生まれた彼は、オックスフォードで医学や自然科学を学び、1660年には母校のギリシャ語教授になっている。修辞学や倫理学も教えた。

やがて彼ロックは、アンソニー・アシュレー・クーパー、後のシャフツベリー伯 (Anthony Ashley Cooper, 1st Baron Ashley and 1st Earl of Shaftesbury, 1621–83) の侍医になり、1672年大法官に任じられた伯爵の秘書官になった。1783年にオランダに亡命し、後の英国王オレンジ公ウィリアム (Prince of Orange) に厚遇されている。このようにして、彼にとり、名誉革命後の活躍の道が開けるのである。

ロックの主要作品には『統治論二篇』 (*Two Treatises on Government*, 1690。実際の発売は前年10月)、『人間悟性論』 (*An Essay concerning Human Understanding*, 1690 (実際の発売は前年12月)。1706)、『聖パウロの書簡』 (*St. Paul's Epistles*, 1705–07) などがある。彼は人間の経験を重んじ、自力本願を唱えて、独立自主の近代的精神の重要性を説いた。『統治論』ではホッブズの理論を更に改革、前進させて、有名な「抵抗権」を主張している。国民が権力者の交替を成し得るといふものである。因みに、ロックは20世紀に流行する「意識の流れ」 (stream of consciousness) の手法の遠祖ともされる。

## 8.

以上、王政復古期から名誉革命後の時代にかけての散文界を見渡してみたが、同世界は、まだ小説の類こそ振わないものの、非常に活発だったことが分かる。古典主義的な風潮を背景にしたこのような散文の隆盛を通して、既述のような英語散文の確立が果たされたのである。そのスタイルが簡潔、明瞭を旨とするようになったことは、既に掲げたドライデン以下の諸文人の引用例からも明らかであろう。

小説史のみに限ってみても、バンヤンの作品が近代小説の誕生に果たした役割は極めて大きい。

このように、17世紀後期は、英国散文史、同小説史の上で、大いに重視すべき時期である。それは、両史上最初の豪華な時代、即ち次の18世紀のための礎石を据えた大切な時期なのである。

既にして標準的英語散文は確立された。近代小説の芽も吹いた。道具は整い、方向も示されたのである。あとは開花、発展あるのみである。デフォーやスウィフトは視界の内に入った。彼らの更に向うには、やがてサムエル・リチャードソンやヘンリー・フィールディ

ングらの姿がおぼろげながらも見えてくる筈である。

だが、新しい話を始める前に17世紀後期の生んだ代表的「小説」を一作、概観しておきたい。それがとりあえず次項の仕事である。

## 9.

アフラ・ベーン [Aphra (or Afra, Aphara, Ayfara) Behn, 1640–89] は、英文学史上最初の女流作家、文筆で生計を立てた最初の女性などと言われている。「小説」たる『オールノーコー、或いは奴隷の王子』(*Oroonoko: or The History of the Royal Slave*, 1678)などで知られている。

劇作をやり、「小説」を書いたこの女流文人は、その生涯にはっきりしないところがある。誕生の地や実家の姓にも断定出来ないところがあるし、彼女の父が総督に任命された(?)とされるスリナム (Surinam, 南アメリカ北東部海岸に面したオランダ植民地) に彼女自身が実際に赴いたことがあるのかもはっきりしない。ベーン自身はスリナムで育てられたと主張しているが、今日では、『オールノーコー』中の植民地に関する記述は、書物や他人の話から得たものであろうと考えられている。ウォルター・アレン (Walter Allen) は、その背景的素材はジョージ・ウォーレン (George Warren) の『公正なるスリナム解説書』(*Impartial Descriptions of Surinam*, 1667) に基づくものであろうと言っている(『英国小説』)。

ベーンは理髪師と乳母の娘とも言われる。1664年、彼女はオランダ系のロンドン商人ベーンと結婚したが、夫は2年後に死んだ。その1666年、彼女は国王チャールズ2世によってオランダ戦争中のネーデルランドに諜報部員として送られる。彼女は同国王のお気に入りだったと言われる。帰国後、借金で投獄されるが、国王は彼女を助けようとしなかったらしい。ジェーン・スペンサーは、ベーンはネーデルランドで、スリナムで知り合ったウィリアム・スコット (William Scott) から、オランダ軍艦のチームズ川侵攻のことを警告されたが、上司たちは彼女の報告を無視し、金を払わなかった、と記している。[ベーン『「放浪者」他』序文 (*The Rover and Other Plays*, Oxford University Press, World Classics)]。

まもなく釈放された彼女は、いよいよ文筆の道に入り、まず劇作を始めた。最初の内は匿名で、男性の作者として書き、やがて本名A・ベーンで出してゆく。最初の作品で悲喜劇の『強いられた結婚』(*The Forc'd Marriage*) は1670年に上演された。以後、彼女は喜劇作者として認められる。『放浪者』(*The Rover*, 1677年春初演) がこの方面の代表作である。小説『オールノーコー』はその翌年に出た。他の喜劇に『好運な機会』(*The Lucky Chance*, 1686)、笑劇たる『月の皇帝』(*The Emperor of the Moon*, 1687) などがある。

ベーンは死の前に、大変なスキャンダルの的になったと言われている。彼女は、文人として多くの劇作品を始め、小説やパンフレット類を書いている。

## 10.

“小説”，『オールノーコー』は、アフリカの王子オールノーコーと彼の恋人イモインダ (Imoinda) を中心とした悲劇の物語である。本作について、アレンは次のように述べている。

彼女（＝ベーン。筆者注）の最も有名な散文の物語 *Oroonoko: or The Royal Slave* [『オールノーコー、または奴隷の王子』、1678] は、高貴な野蛮人という観念の最初の現れであり、ルソーより70年ばかり前である。それはあらゆる反帝国主義的文学または反植民地的文学の先駆と解することができる。しかし現在の主な関心は、Mrs. Behn が、慣習的なロマンスの物語に、真実らしさを付け加えようとしたことにある。Mrs. Behn は英雄劇から散文の物語に移ったので、*Oroonoko* の物語は本質的には英雄劇を散文の物語にしたものであり、不運な恋人たちが、常に誠実で、死に際しても、ほとんどあり得ないほどの高貴さを維持する物語である。・・・Mrs. Behn はオールノーコーとその美德を、彼女の仲間であるキリスト教徒を懲らしめる鞭として用いている。現在 *Oroonoko* の価値が減少しているのは作者の芸術上の失敗のためよりも、むしろ我々の知識が大いに増したためである。・・・英雄劇の人物にロンドンの街で会うことはけっしてないとしても、少なくとも、ロンドンの劇場に行く人々は彼らを見慣れていたからである。

ウォルター・アレン『イギリスの小説』（和知誠之助監修。文理）

ベーン夫人は、冒頭の部分で、ここに書くことの大部分は自ら目撃したと述べている。又、自ら目撃出来なかったことは、この物語のヒーロー自身から聞き、彼はその青年期に関するすべての「報告書」を彼女たちに与えてくれたのである、とも言っている。作りごとではない、十分な現実に基づく話だ、と主張しているのである。

だが、実際には、既に記したように、彼女の主張には大いに疑問があるわけであり、その主張は、アレンも言うように、一つの「工夫」、つまりはテクニクという風に考えるのが自然のようである。それらしく見せる、読者に本当だと思わせるあのデフォー流のやり方である。

ともあれ、主人公のオールノーコーの冒険の最後の部分は南アメリカの植民地スリナムを舞台としているのである。作者はまず、交易や原住民奴隷たちの純粹さ、砂糖農園で働く彼ら奴隷の売買などについて述べる。そして、コラマンティエン (Coramantien) というアフリカのあるニグロ王国の話から始めるのである。

この国の王は、百数十才の老人であり、彼の孫で後継者に当たるのが主人公の青年オールノーコー王子 (Prince Oroonoko) である。オールノーコーは大変資質の優れた青年だったが、17才の時、ある戦いのさ中に、彼を育成した老将軍が彼をかばって敵の矢に当たり、戦死してしまう。王子オールノーコーの苦悩は深かった。が、彼は将軍のあとを受けて、2年間にわたるこの戦いを遂行した。その後、宮廷に戻る。彼は仏語や英語、スペイン語を知り、また、ローマ人を称賛していた。英国の内乱や英国王の悲惨な刑死のことも承知していた。彼の容姿は大変立派であり、教養も深かったのである。ベーン夫人は、彼と会った時の印象を次のように述べている。

彼（＝オールノーコー。筆者注）は、かなり長身で、その姿は、想像し得る限り最高に厳正であった。最も有名な彫像家さえも、全身これほどに見事に仕上がった人間の姿を作り出すことは出来なかったであろう。彼の顔はこの国の大部分の人々がそうである褐色でさび色がかかった黒色ではなく、完璧な黒檀色または光沢のある黒玉の色

であった。両眼はと言えば類例のないほどに畏敬の念を起こさせる、非常に鋭いまなざしであった。その白い部分は雪のようで、彼の歯と同じだった。鼻は高く、ローマ人のそれで、アフリカ人特有の平たい鼻ではなかった。口は見たこともない程に立派な形で、他の黒人たちに普通の大きなめくれた唇からは程遠かった。顔の全体の均衡や相貌はかくも気高かつ整っているので、色を除けば自然界にこれ以上に美しく、感じがよく、見栄えのすばらしいものはなかった。・・・彼が話すのを聞いた者は誰でも誤まり、つまりあらゆる洗練されたウィットは白人に、とりわけキリスト教国の白人に限られたものだということの誤まりを悟るであろう。・・・

アフラ・ベーン 『オルノーコー』 (筆者訳)

He was pretty tall, but of a shape the most exact that can be fancy'd; The most famous statuary cou'd not form the figure of a man more admirably turn'd from head to foot. His face was not of that brown rusty black which most of that nation are, but of perfect ebony, or polished jett. His eyes were the most awful that cou'd be seen, and very piercing; the white of 'em being like snow, as were his teeth. His nose was rising and *Roman*, instead of *African* and flat. His mouth the finest shaped that could be seen; far from those great turn'd lips, which are so natural to the rest of the negroes. The whole proportion and air of his face was so nobly and exactly form'd, that bating his colour, there could be nothing in nature more beautiful, agreeable and handsome. ... whoever had heard him speak, wou'd have been convinced of their errors, that all fine wit is confined to the white men, especially to those of Christendom.

Aphra Behn: *Oroonoko* (*Shorter Novels: Seventeenth Century*, Everyman's Library, Dent ; Dutton)

完全、高貴な理想人の描写である。いわゆる「高貴なる野蛮人」(Noble Savage)の典型と言える。文章も明晰になって来ている。

さて、戦死した將軍には大変美しい娘が一人いた。名をイモインダ (Imoinda) と言う。この物語のヒロインである。作者は彼女を「我々の若き軍神マルスに対する美しい黒人のビーナス (the beautiful black *Venus* to our young *Mars*)」と呼んでいる。

戦いから帰ったオルノーコーは父將軍の死に対する侘びを言わんものとその娘を訪ねる。その結果、オルノーコーは彼女に魅せられ、イモインダも彼を受け入れる。ところが、老王がイモインダの美貌に心を引かれ、彼女を宮廷に召してしまう。涙に暮れる娘は老王に対して、自分は他の男性のものだと言う。老王は怒った。

事態を知ったオルノーコーも猛り狂う。悲しみに暮れるオルノーコーは、イモインダに会おうと決意した。

結局、老王はイモインダを密かに奴隷として他国に売ることにした。新たな戦いから戻ったオルノーコーはイモインダは死んだと聞かされる。英国船に招待された彼は、欺かれて部下たちとともに南米のスリナムに奴隷として連れていかれ、そこでトレフリー (Trefry) という主人のものだとされるが、主人は立派な人物であった。同じ農園で偶然の巡

り合わせで、イモインダと合う。彼女はクレメネ (Clemene) と名づけられていた。気高く立派な女奴隷として知られていた。イモインダと結婚したシーザー (Caesar=オルノーコー) は、自由を求めて妻や他の奴隷たちと逃亡するが、結局つかまり、残酷に鞭打たれる。彼は終には、身籠った最愛の妻を連れて逃げるが追跡され、彼女を涙ながらに殺す。最後には、むごい処刑をされる。その体は分割されて、主な農園に送られたのである。

ペーンは「私のペンの名声が彼の栄光ある名前を勇敢で、美しく貞節なイモインダの名とともに後代に残らしめるに十分なることを願う」と記して筆を置いている。コロニアリズムという異国趣味も感じられる初期の「小説」の一つである。同時にヨーロッパ人の人道主義的視点という一面も見られるのであろう

## Ⅱ. 18世紀市民社会におけるジャーナリズムと「小説」

### 1.

著名な英国の政治学者ラスキ (H. J. Laski, 1893-1950) は、次のように述べている。

十八世紀は一六八八年の革命に明けるといえよう。革命の成就とともに、神授権のドグマは永久にイギリスの政治から影を潜めた。それに代りうるものとしては、ヒュームとバークによる新哲学体系の出現を待たねばならなかった。

『イギリス政治思想Ⅱ』(堀豊彦、飯坂良明訳、岩波書店)

H.J.Laski, *Political Thought in England*

ラスキの言うように、名誉革命は王権の抑制、貴族・僧侶階級の後退、そして中産階級の勃興と発展のための重要な契機となった。かつてピューリタン革命によってぶ厚い中世という岩盤が打ち砕かれたところの英国社会は、この名誉革命をもって、一段とその近代化を押し進めることが出来たと言える。事実上この革命をもって始まる18世紀においては、社会のあらゆる面で新しい勢力が誕生していった。「イギリス精神の一大特質は思弁よりも実践の問題に向かうにある」と説くラスキは、この18世紀社会について更にこう述べている。

革命時の諸理論は一世代を経ぬうちに、全くすたれてしまった。国教と農業とがその確乎たる地位を失い始めたイギリスにあっては、17世紀立憲思想はもはや無意味となった。国教会は、一方に非国教徒の運動、他方に新合理主義からの挑戦を迎えたが、これに耐えてその節操をまもり、自己の安全を保障することが急務であった。・・・ヒューム及びアダム・スミスは、商業が農業の繁栄を妨げるものではないことを解明しようとした。ウォルポール治下の表面的な静けさにもかかわらず、新たな諸勢力が急速に擡頭しつつあった。・・・ジョンソンの堅固な道徳、リチャードソンとフィールディングの新文学、コリアーの憤激によって荒らされたあと、ガリックによって建て直された演劇、ローとウェズレイをその偉大な象徴とする信仰復興運動等は、この沈滞が死ではなくてむしろ仮眠であることを物語る。・・・イギリスは終にモンテスキューやルソーの意義にめざめたのである。・・・民主主義イギリスの誕生は、十八世紀初期の自己満足的な楽観主義によって可能となった。

(「同上」)

こうした18世紀は、政治、社会を始めとして、思想、倫理、宗教、経済、戦争等多くの面で、顕著な改変を蒙りかつ目覚ましい進展を遂げた。それはある意味において、今日現代の直接的源泉に当たる時代であったとも言える。この世紀にあっては、中産階級を中心とする市民社会が発達し、自然科学が前世紀後半に引き続いて一層の進歩を見せた結果、世紀後葉には産業革命が始まった。植民地の飛躍的拡大と発展は、産業革命の遂行と相俟って、英国の国力を増大せしめる。この偉大な世紀において、大英帝国は世界の七つの海にユニオン・ジャック旗を高々と翻し、国土面積、人口の両面ともに己れにまさる宿敵フランスを圧倒する。

この世紀の主な出来事には次のようなものがある。即ち、イスパニア王位継承戦争(1701—14)、英軍のジブラルタル占領(1704)、合同法令(Act of Union, 1707)の発布——スコットランドを合併し、大ブリテン王国が成立する——、ユトレヒト条約の締結(1713)——英、仏、オランダ、プロシヤ、ポルトガルの講和。これにより英国はハドソン湾地方などを獲得する——、ハノーヴァー王朝の始まり(1714～現在)、ウォルポール内閣の勢威(1721—42)——責任内閣制度の初め——、オーストリア王位継承戦争(1740—48)、ジョージ王戦争(1744—48)——英仏の植民地戦争——、ジェームズ党の反乱(1745—46)——スチュアート家の王位回復計画——、大英博物館(British Museum)の創立(1753)、パリ条約の締結(1763)——英仏の講和——、ワットの蒸気機関の発明(1765)、アメリカ独立戦争(American Revolution, 1775—83)、フランス革命(French Revolution, 1789)、対仏大同盟(1793—97)などである。

いずれも、いろいろな意味で、西欧世界を揺り動かした出来事ばかりである。

## 2.

この18世紀、思想的には、合理主義的精神が支配的であった。既述のように、中産階級が勢力を増し、そうした影響もあって、むしろ質実な、常識的な考え方が一般的となった。宗教面においてさえ、合理思想が幅をきかした結果、「理神論」(Deism)が風靡した。この理神論は、ベンジャミン・フランクリン(Benjamin Franklin, 1706—90)などのアメリカ独立戦争の英雄たちの奉じた思想ともなった。

文学は都会文学中心となり、自然や田園を謳うことは少なくなる。ジャーナリズムが勃興し、文学クラブやコーヒー店(coffee house)が流行する。コーヒー店は文人たちの集まる場ともなった。

ドライデン時代に引き続いて、知性や法則、合理性を重んじる古典主義[Classicism, 人によっては擬古典主義(Pseudo-Classicism)とも言う。本物ではないというところから出た呼称]の色合が濃かった。新聞を含む散文文学が大発展を遂げ、小説(Novel)が誕生したのも顕著な出来事であった。これは中産階級の発達や読者層の拡大とも大いに関係することであった。文壇の中心は依然として詩にあったが、散文文学、就中、小説の追い上げには著しいものがあったと言わねばならない。

この18世紀古典主義文学時代の前半期は、同文学の完成期であって、アレクサンダー・ポープが中心人物となった。また後半期はその退潮期に当たり、サムエル・ジョンソン博士が大御所的存在であった。なお、哲学面ではベーコン、ロック以来の経験論が発展し、経済面ではアダム・スミス(Adam Smith, 1723—90)が出て、著名な『国富論』(An Inquiry

*into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 1776)を著わしたわけである。

ともかく、古典主義を基調とするこのような合理的、常識的風潮が支配的だったので、後世の詩人・批評家マシュー・アーノルド (Matthew Arnold, 1822-88) は、この時代を評して「散文と理性の時代」(age of prose and reason) と呼んだ〔『批評集』(*Essays in Criticism*, 1865, '88)〕。広く知られた言葉ではある。

要するに、18世紀は、広がりのある、社会的分化の進んでいった世紀であり、社会の多方面において、現代20世紀にも通ずるようないろいろな新しさや近代性が生じかつ進展した時代であったのである。

### 3.

18世紀の初頭、アン女王 (Queen Anne, 1702-14) の時代を中心とする文学は、「黄金時代 (Golden Age)」、「オーガスタス帝時代」(Augustan Age) などと呼ばれる。これはあえて古代ローマ文学の最盛期たるオーガスタス (アウグスティヌス) 帝 (在位、紀元前27-紀元14) 時代に比した呼称であり、当時の実情を反映していないことは明らかと思われる。

義兄ウィリアム3世 (姉婿に当たる) のあとを継いだアン女王は、ルイ14世 (Louis XIV, 在位1643-1715) を向うにまわした対仏戦争、スコットランド併合などを行なった女王であるが、その統治期間は比較的短かった。

この時代から次のジョージ1世 [George I (ハノーヴァ公)、在位1714-27] 時代にかけての英文壇では、詩のほかに、散文文学がかつてない隆盛を見せるようになった。ジャーナリズムの発達やダニエル・デフォー、ジョナサン・スウィフトらの活躍がその柱となった。ジャーナリズムの始まりは、この時代に求められるのが普通である。この方面では、リチャード・スティール卿 (Sir Richard Steele, 1672-1729)、ジョゼフ・アディソン (Joseph Addison, 1672-1719)、それにデフォーらが知られる。

当時、定期刊行物 (periodicals) が、新しい市民社会の要請に答えて出現し、一般大衆を大いに啓発した。とりわけスティールとアディソンがこの分野で果たした役割は偉大だと言わねばなるまい。彼らは新聞の執筆と発刊を通じて社会啓蒙に力を尽くし、散文の洗練、完成とその普及、女性を含む読者層の拡大に大きな貢献をした。そして彼らの「新聞随筆」は、デフォーやスウィフトの物語作品ともども、近代小説の誕生と隆盛をもたらす上でも重要な働きをしたのである。

スティールとアディソンは、対照的な性格だったが、力を合わせて『タトラー』紙 (*The Tatler*)、『スペクテイター』紙 (*The Spectator*) を出した。

『タトラー』はスティールが創刊したもので、やがてアディソンやスウィフトらが参加した。1709年4月から1711年1月2日まで続き、1週3回刊行された。スティールは、「ビッカースタッフ氏、彼の諸提案をなす」(Mr. Bickerstaff issues his proposals) と題して、次のように述べている。

英国の善良なる人々のために出版された他の諸新聞は確かにとても健全有益な結果をもたらし、その特性において賞賛に値するものではあるけれども、それらは物語の主要な目的についてはいないように思える。つまりそうした物語とは、私は控え目にながら思うのだが、国の事を見るために自分のことは無視するほど公共精神の豊かな



思慮深い人々のために主として意図されるべきものなのである。さて、これらの紳士たちは、大部分、強い熱意と弱い知力の持主たちなので、国家のそのような価値ある、優秀な方々がそれによって、読書の後、何を考えるべきかを教えられるかも知れない何かを提供することは、寛大かつ必要な仕事なのである。これが私の新聞の最終目的となるであろう。その中で、私は私に生じるあらゆる種類のことを、時々、報告し、考察するつもりである。そして私の忠告や意見を毎火曜日、毎木曜日、毎土曜日に新聞の便宜をはかって発表するであろう。また私は、敬意を表して本紙のタイトルを考え出した女性の読者たちにとって楽しみとなるような内容も含めようと決意している。故に私は、あらゆる人々に、差別なく、熱意を込めて望みたいのだが、さしあたり無料で、将来は1ペニーで読んでもらいたい。むろん呼び売り人たちが危険を覚悟でそれ以上の額を取ることは厳禁するものである。

リチャード・スティー爾『タトラー』〔ルイス・ギブズ編（エヴリマンズ・ライブラリー）〕（筆者訳）

Though the other papers, which are published for the use of the good people of England, have certainly very wholesome effects, and are laudable in their particular kinds, they do not seem to come up to the main design of such narrations, which, I humbly presume, should be principally intended for the use of politic persons who are so public-spirited as to neglect their own affairs to look into transactions of state. Now these gentlemen for the most part being persons of strong zeal and weak intellects, it is both a charitable and necessary work to offer something whereby such worthy and well-affected members of the commonwealth may be instructed, after their reading, what to think; which shall be the end and purpose of this my paper, wherein I shall, from time to time, report and consider all matters of what kind soever that shall occur to me, and publish such my advices and reflections every Tuesday, Thursday, and Saturday in the week, for the convenience of the post. I resolve also to have something which may be of entertainment to the fair sex, in honour of whom may I have invented the title of this paper. I therefore earnestly desire all persons, without distinction, to take it in for the present gratis, and hereafter at the price of one penny, forbidding all hawkers to take more for it at their peril.

Richard Steele: *The Tatler*, Selected and Edited by  
Lewis Gibbs, Everyman's Library, Dent ; Dutton

この『タトラー』に次いで発刊された『スペクテイター』は、ホイッグ党系紙で、1711年3月1日から1712年12月6日まで出された。555号までである。そして更に、アディソンが1714年に復刊して、1714年12月に終刊を迎える。総計635号までということになる。日曜日を除く日刊紙であった。

やはりスティー爾、アディソン両名が健筆を振ったが、とりわけ架空の田舎紳士ロジャー・ドゥ・カヴァリー卿（Sir Roger de Coverley）を登場させたシリーズ、いわゆる「カヴァ

リー物」(Coverley Papers)は、出色の出来栄えを誇っている。

#### 4.

スティールはアイルランドのダブリン出身で、オックスフォードを中退した。アディソンに比べて独創性に富んでいた。また人間味にも溢れ、自ら創刊した『タトラー』に既出の「アイザック・ビッカースタッフ」(Isaac Bickerstaff)なる筆名で執筆した。スティールはホイッグ系の人物で、下院議員にも選ばれている。1713年には『ガーディアン』紙(*The Guardian*)も創刊した。

他方、アディソンのほうはイングランドのウィルトシャー(Wiltshire)のミルストーン(Milston)に生まれている。父のランスロット・アディソン(Lancelot Addison)は教区牧師であった。ジョゼフは1687年にオックスフォードのクィーンズ・カレッジに入り、ラテン詩に卓越していたところからマグダレン・カレッジの奨学資金を得たという。後、大学評議員(Fellowship)にも選出されている。彼の文学経歴はM・Aを得た1693年に始まったとされる。生来温厚な性格のアディソンは、古典の教養豊かで、穏健、平明な筆致を持つ優れた随筆家であり、劇作でも悲劇『ケイトウ』(*Cato*, 1713)などで評判を取った。これにはポープがプロローグを書いた。アディソンは更に詩作もしている。彼もホイッグ党の政治家として名をなした。オックスフォードのマグダレン・カレッジ構内の「アディソン通り」(Addison Walk)にも名を留めている。

スティールやアディソンは、ウィリアム・コングリーヴやジョン・ヴァンブラー卿(Sir John Vanbrugh, 1664-1726)、マールバラ公(John Churchill, 1st Duke of Marlborough, 1650-1722)らとともにキット・キャット・クラブ(Kit-Cat Club)に拠っていたが、『スペクテイター』紙は、「スペクテイター・クラブ」(Spectator Club)という架空のクラブが発刊するという形を取った。当時流行のコーヒー店に注目したものである。同紙では、対談形式が見られ、日常の社会生活を描いた。そして時代や社会の批評や矯正を目指した。社会啓蒙的な姿勢を示したのである。同時に、ユーモアやウィットにも富んでいた。

「スペクテイター・クラブ」の会員としては、ロジャー・ドゥ・カヴァリー卿の他にウィル・ウィンブル(Will Wimble)、アンドリュー・フリーポート卿(Sir Andrew Freeport)などがいた。いずれも架空の人物である。会員たちの人物描写も見事である。次の一節は、サー・ロジャーがウェストミンスター寺院(Westminster Abbey)を訪れた時、その内部をいささか興奮気味に見て回る姿を描写したものである。アディソンの筆になる文章である。

サー・ロジャーは、次の場所で、手をエドワード3世の剣の上に置き、その柄先の<sup>つか</sup>上によりかかりながら、この黒太子の物語のすべてを私たちに語ってくれた。そしてこうしめくくった。サー・リチャード・ベイカーの意見によれば、エドワード3世は英国の玉座に坐ったことのある最も偉大な王子たちの一人である、と。私たちはそれから懺悔王エドワードの墓を見せられた。それについて、サー・ロジャーは、彼は悪魔に触れた最初の人だと私たちに知らしめた。そのあと、ヘンリー4世の墓を見たが、サー・ロジャーは頭を振り、王の治世の災難についてはすばらしい読み物があると言った。

私たちの案内者は、頭部のない英国王たちの一人の姿がある場所の記念碑を指差した。そして打ちのばされた銀で出来たその頭部は数年前に盗み去られたということ私たちに知らしめるのであった。「誰かホイッグ黨員だ、私は請け合ってもよい」とサー・ロジャーは言う。「諸君は王たちをもっとしっかり守るべきだ。用心しないと、連中は胴体のほうまで持ち去ってしまうだろう」

J・H・ロップバン編『アディソン：スペクテイター』（筆者訳）

Sir Roger in the next place laid his hand upon Edward the Third's sword, and leaning upon the pommel of it, gave us the whole history of the Black Prince: concluding, that in Sir Richard Baker's opinion, Edward the Third was one of the greatest princes that ever sat upon the English throne.

We were then shown Edward the Confessor's tomb; upon which Sir Roger acquainted us, that he was the first who touched for the evil: and afterward Henry the Fourth's; upon which he shook his head, and told us there was fine reading in the casualties of that reign.

Our conductor then pointed to that monument where there is the figure of one of our English kings without a head; and upon giving us to know, that the head, which was of beaten silver, had been stolen away several years since; "Some whig, I'll warrant you," says Sir Roger; "you ought to lock up your kings better; they will carry off the body too, if you don't take care."

*Addison: Selections from The Spectator*, Edited by J.H.Lobban,  
The Cambridge University Press, 1952 (original edition, 1909)

ここには、稚気さえ漂わせた上機嫌なサー・ロジャーの人物像が簡潔、明瞭な文体でユーモアも交えつつ、生き生きと描き出されている。このサー・ロジャーは、18世紀の英国地主階級の紳士の典型と言ってよい。

ウォルター・アレンは『スペクテイター』中のサー・ロジャーを含む架空の人物たち（先に挙げたような人物たち）について述べている。

〔彼らは（筆者註）〕、小説の作中人物と同じように有名であり、優れた小説中の人物としての自律性を持っていて、彼らが描かれているエッセイの限界を越えて生きていられる。Addisonは50年後に生まれていれば、きっと偉大な小説家になり得たであろう。しかし彼が一七一一年にSpectator新聞を書き始めた時には、作家が人間の性格に関心を持てば必然的に小説を書く、というようにはまだ至っていなかった。サー・ロジャーその他の人物は、書かれることのない小説の戸口に立っているのである。

『イギリスの小説』（和知誠之助監修・文理）

5.

アディソン、それにスティールは、小説そのものは書かなかったけれども、近代小説の誕生前夜において極めて重要な役割を果たしたわけである。彼らはサムエル・リチャード

ソンに先駆けて、日常的な人物像や生活態度、慣習などを気負うことなく淡々としかも非常にリアルに描写したのである。この点において、彼らの「随筆」は、小説にそのままつながり得たのであった。二人のうちでも特にアディソンの随筆やそのスタイルが後世の文人たちに与えた影響は大きい。その中にはアメリカの短篇小説の元祖的存在たるワシントン・アーヴィング (Washington Irving, 1783-1859) も入る。彼は「随筆的短篇小説」とでも呼べそうな作品を書いたが、それらにはアディソンの場合同様に温雅でユーモアに満ちたものが多い。

なお、アディソンやスティーラーと近代小説との関連についてはロップバン (J.H.Lobban) もこう述べている。

「我々は、もしアディソンが広汎な計画に基づいて小説を書いていたら、それは我々が所有しているいかなる作品よりも優れたものとなったことであろう、ということはいささかも疑わない」これはマコーレーらしい帰納という希薄な大気中への典型的な飛翔の一つである。スティーラーやアディソンが完全なプロットを組み立て、押し進めることが出来たであろうと考える理由はない。カヴァリー物は、それとは違って、同時に、それらからスティーラーとアディソンが英国小説の最も重要な開拓者たちに属する権利をしっかりと確立しているという証拠となっている。アディソンの名声は、蓋然性からの支えを必要としない。彼は英国文学に新種を完成せしめるのに役立ち、彼を凌駕出来なかった後継者たちにユーモアに満ちた風刺の持つ十分な可能性を示したのである。

J.H.ロップバン編『アディソン：スペクテイター』序文 (筆者訳) Introduction of Addison: Selections from *The Spectator*, Edited by J.H.Lobban, The Cambridge University Press, 1952 (original edition 1909)

大変示唆に富む説明ではある。

ともかく、アディソンとスティーラーは、中産階級の代弁者として、また啓発者として『タトラー』、『スペクテイター』に「雅俗混交体」をもって「書きませもの (farrago)」(ともに斎藤勇) を書いたのであるが、既に言及した通り、批評の実績を残してその分野の手本となり、随筆面で後のチャールズ・ラムやウィリアム・ハズリット、ドゥ・キンシーらに基盤を与えたのみならず、近代小説誕生のための大切な準備を、その文体、内容、雰囲気、更には読者層の開拓などの諸面において、相当になしたと言ってよいのである。

ところで、当時の新聞では他にデフォーの『レヴュー』もよく知られているが、これは『タトラー』や『スペクテイター』よりもはやく登場している。また、今日の『モーニング・ポスト』紙 (*The Morning Post*) は1772年に創刊され、『タイムズ』紙 (*The Times*) は1785年に *The Daily Universal Register* として創められている。その改称は1788年のことである。

## 6.

ジャーナリズムの流行もさることながら、詩壇は依然文学界の中心的立場を占めていた。そしてその第一人者は、言うまでもなくアレクサンダー・ポープ (Alexander Pope, 1688-1744) であった。まさしく古典主義の権化のような人物である。彼はこの期の文壇の大御

所として勢威を誇ったが、スウィフトとともに「スクリブレラス・クラブ」(Scriblerus Club)に属した。このクラブには他に、コングリーヴ、ジョン・アーバスノットらがいた。彼ポーブは大変博識であり、努力家の天才詩人である。

1699年、ウィルズ・コーヒー店 (Will's Coffee House) で当時の文壇の大御所ドライデンの姿を垣間見たことから発奮したというエピソードも伝わっている。後、夢は叶い、彼自身同コーヒー店に出入りする身分になる。代表作としては、当時はやりの詩で書いた批評たる『批評論』(An Essay on Criticism, 1711)や『人間論』(An Essay on Man, 1733-34)、また風刺詩『髪毛盗人』(The Rape of the Locke, 1712)や『愚人列伝』(The Dunciad, 1728。第4巻は1742)などがある。その他にも、ホーマー(Homer, 紀元前10世紀頃の盲目のギリシャ詩人)の翻訳やシェークスピア全集の校訂出版などの大きな業績を残した。

ドライデンのあとを継ぐこの代表的な古典主義者は、学問や知識を重んじ、節度や良識を大切にされた。「英雄対韻句」(heroic couplet)を多用したことで知られている。それらはいわゆる諺となって一般に広く流布し、定着している。たとえば「正直者は神の最高傑作だ」[An honest man's the noblest work of God (『人間論』)]とか「生兵法は大怪我のもと」[A little learning is a dang'rous thing (『批評論』)]などがそうである。彼の本領は詩作にあったが、多方面に才能を駆使したわけであり、当時の文壇の頂点に立って、その影響力には並々ならぬものがあつた。なお彼は、スウィフトの『ガリヴァー旅行記』出版にも友人として骨折つたと推察されている(中野好夫)。

ポーブは批評家的詩人としての側面を色濃く持っていたが、彼と同時期の批評家としては、アディソン、スティール、ジョン・デニス(John Dennis, 1657-1734)、スウィフト、ジョージ・ファーকার(George Farquhar, 1678-1707)、それにレオナード・ウェルステッド(Leonard Welsted, 1688-1747)などが挙げられる。

この時代の詩人には、他にトマス・パーネル(Thomas Parnell, 1679-1718)、マシュー・プライアー(Matthew Prior, 1664-1721)、ジョン・ゲイ(John Gay, 1685-1732)、アラン・ラムゼイ(Allan Ramsay, 1686-1758)などがいた。また、ジェームズ・トムソン(James Thomson, 1700-48)は、衆知のように、ロマン主義詩の先駆として有名である。『四季』(The Seasons, 1726-30)や『怠惰の城』(The Castle of Indolence, 1748)が代表作である。

演劇は、前世紀末において、ジェレミー・コリアー(Jeremy Collier, 1650-1726)による風習喜劇攻撃を受けて以来、沈滞に陥ってしまった。18世紀においてもこの分野は、一部の作品を除き不毛だったと言わざるを得ない。が、ポーブ時代には、アディソンに加え、ジョン・ゲイが『乞食オペラ』(The Beggar's Opera, 1728)で大ヒットし[この軽喜劇は時の宰相ロバート・ウォルポール(Robert Walpole, 1676-1745)を風刺した作品]、シェークスピア全集の校訂をしたニコラス・ロウ(Nicholas Rowe, 1674-1718)や後に見るように、ヘンリー・フィールディングと因縁の深い喜劇作者コリー・シバー(Colley Cibber, 1671-1757)も名をなして、ともに桂冠詩人にさえなった。

## 7.

問題とする散文界では、やはり前代同様の古典主義的な風潮を背景として、アディソン

やスティールのほかにも多彩な活動が見られた。

まず、ダニエル・デフォーは、ジャーナリスティックな手法をもって、夥しい量にのぼる著作物をものしたが、それらの作品にはいずれも現実主義的精神が横溢している。とりわけ『ロビンソン・クルーソーの冒険』や『モール・フランダーズの幸、不幸の物語』などは、近代小説の先駆作として重視されている。更に、しばしばデフォーと並べて論じられるジョナサン・スウィフトの『ガリヴァー旅行記』も同じように近代小説の先駆作とみなされている。スウィフトは風刺の範囲内に留まったが、それでもデフォーに拮抗する重要作家には相違ない。両人は論争したこともあり、余り仲はよくなかったが、「ライヴァル」同士として当時の散文界の先頭に立っていたのである。因みに、スウィフトは、無学な成り上がり者としてデフォーを見下しており、「名前は忘れたがああ……」などと言っている。ライヴァル同士として当時の散文界の先頭に立っていたのである。両者については、別に改めて論じることにする。

風刺作家ジョン・アーバズノット (John Arbuthnot, 1667–1735) は、『ジョン・ブルの歴史』(*The History of John Bull*, 1712) を書き、英国人の代名詞たる「ジョン・ブル」の名を残したことで知られる。スコットランド人の医者であった。政治風刺のパンフレットをいろいろ書いている。スウィフトの『ガリヴァー』誕生の契機となった「スクリブレラス・クラブ」企画の『マルティヌス・スクリブレラス回想録』(*Memoirs of Martinus Scriblerus*, 1741) 執筆の主役も演じている。スウィフトと親しかった。

オランダ生まれのバーナード・マンデヴィル (Bernard Mandeville, 1670?–1733) も、『蜜蜂の寓話』(*The Fable of the Bees; or, Private Vices, Public Benefits*, 1714) というユニークな社会風刺書を著わした。詩と論文から成る作品であり、ニーチェ (Friedrich W. Nietzsche, 1844–1900) の先蹤をなすと言われている。

モンタギュー夫人 (Lady Mary Montagu, 1689–1762) も当時を代表する文人の一人である。トルコ大使夫人だった彼女は、故国に寄せた書簡集『トルコ書簡』(*Turkish Letters*, 1763) などを残した。

哲学方面ではヒュームとバークレーが極立っている。デヴィッド・ヒューム (David Hume, 1711–76) の代表作は哲学面ではむしろ『人性論』(*A Treatise of Human Nature*, 第1、2篇、1739) 及び『道徳、政治論集』(*Essays, Moral and Political*, 第1篇、1741) であり、歴史の方では『英国史』(*The History of Great Britain*, 1754–62、まとめて8巻として出版されたのは1763年) である。ヒュームは、ホップズ、ロックのあとを継ぐ思想家で、英国18世紀思想界の代表的存在である。エジンバラの名家に生まれた。エジンバラ大学で学び、後、商業にも従った。スコットランド教会から破門運動を起こされたこともある。

ヒュームはフランスのルソー (Jean Jacques Rousseau, 1712–78) ややはりスコットランド人たるアダム・スミス (Adam Smith, 1723–90) と親密な交友関係を結んでいた。もともと、ルソーからは誤解がもとで絶交されたりもした。ヒュームは、北部担当国務大臣コンウェイ将軍の下で次官をつとめたりしたこともあるが、彼を訪問したベンジャミン・フランクリンらが中心となったアメリカ独立宣言 (Declaration of Independence) の発布の年1776年の8月に没している。彼は経験と観察に頼り、その哲学は「懐疑的実証主義」と言われている。また、歴史書執筆もその哲学と深いかわりを持っていた。次の一節は、

そうした歴史書『英国史』からのものである。チャールズ1世処刑の場面である。

ホワイトホール前の通りが処刑に決められた場所であった。というのは、自分の宮殿の見えるまさにその場所を選ぶことにより、国王の尊厳に対する人民の正義の勝利を一層強く明示することが意図されたのであった。王が処刑台上上がった時、彼はそこが兵士たちによって囲まれているのを知った。それで彼は、人民の誰によっても聞いてもらうことは期待出来なかった。それゆえ彼は、まわりのわずかな人たち、ことにトムリンソン大佐に語りかけた。王はこのところずっと大佐の世話を受けていたし、王のやさしい態度が他の多くの者たち同様、彼に心の変化を促していたからである。王は近年の破滅的な戦争における自身の無実を弁明し、彼の議会が軍隊を徴募する後までは武器を取らなかったし、彼の好戦的な作戦において、先祖たちから伝えられたあの完全な権威を守ることを以外のいかなる目的も持たなかったと述べた。

デヴィッド・ヒューム『英国史』（ダンカン・  
フォーブズ編。ペンギン・クラシックス）（筆者訳）

The street before Whitehall was the place destined for the execution: For it was intended, by choosing that very place, in sight of his own palace, to mark more strongly the triumph of popular justice over royal majesty. When the King came upon the scaffold, he found it so surrounded with soldiers, that he could not expect to be heard by any of the people: He addressed, therefore, his discourse to the few persons who were about him; particularly Colonel Tomlinson, to whose care he had lately been committed, and upon whom, as upon many others, his amiable deportment had operated an intire conversion. He justified his own innocence in the late fatal wars, and observed, that he had not taken arms, till after his parliament had inlisted forces; nor had he any other object in his warlike operations, than to preserve that authority intire, which by his ancestors was transmitted to him.

David Hume: *The History of Great Britain*,  
Edited by Duncan Forbes, Penguin Books

悲惨な場面が、学者らしい、抑制されかつ整った簡明なスタイルで描かれている。大変分かりやすい。他方、ジョージ・バークレイ（George Berkeley, 1685–1753）は、主観的観念論の立場を取ったが、ロックとヒュームの中間に位置して、英国古典経験論をヒュームの完成へと導く役割を果たしたと言われる。『人知原理論』（*A Treatise concerning the Principles of Human Knowledge*, 第1部、1710）が代表作である。彼は宗教家でもあり、バミューダ（Bermuda）伝導を目指して、渡米したこともある（1728）。しかし失敗した。後年、クロイン（Cloyne）の主教になっている。

倫理学者のシャフツベリー伯（Anthony Ashley Cooper, 3rd Earl of Shaftesbury, 1671–1713）はロックの直弟子に当たる。博愛主義者であった。『道徳に関する探求』（*An Inquiry concerning Virtue*, 1699）、『書簡集』（*Letters*, 1716、21、1813）などを残した。彼は、王政復古期のあのモンマス公の叛乱に関与したホイッグ党党首シャフツベリー伯の孫である。

ボリングブローク卿 (Henry St. John, 1st Viscount Bolingbroke, 1678–1751) の『愛国主義の精神』(*The Spirit of Patriotism*, 1749) もこの世紀前半期の代表的書物の一つであろう。政治家の彼は、近代的君主制を説き、エドモンド・バークやベンジャミン・ディズレリーらの保守的政治思想を創始したとされている。

最後に、神学者ジョン・トーランド (John Toland, 1670–1722) の名を挙げておく必要がある。彼は18世紀に風靡したあの理神論の代表的人物であり、『神秘ならざるキリスト教』(*Christianity not Mysterious*, 1696) を書いた。神を合理的に解釈しようとしたのである。有名な書物である。彼は他にも『ミルトン伝』(*The Life of Milton*, 1698) など多くの作品を残している。ロックらとともに16世紀のイタリアに起こったソシヌス教 (Socinianism) を説いて、議会により著作を焼かれたこともあった。

以上で見たように、18世紀初期を中心とする英国散文界は非常に活発だった。もはや英語散文の標準的スタイルもすっかり定着したと言ってもよい。こうした中で、社会の一般情勢とも相俟って、近代小説が文壇に登場し、重要な位置を占めるようになるのはむしろ必然の成り行きであった。ただ、近代小説第一号とされるリチャードソンの『パメラ』(1740) 出現の前の段階で極めて意義深い働きをしたデフォーとスウィフトの両名についてはもっと詳細に検討する必要がある。彼らの(就中、デフォーの)数作品は近代小説誕生過程における本質的に重要な秘密を有していると思われるからである。両者を近代小説の祖と呼ぶ人たちもあるのである。